

三十五回蒼天句会 今月の一句

令和七年九月十一日 兼題…夜長、又は自由

秋雨や炎の長き和蠟燭

公子

長き夜未知なる旅へ地図開く

婦紗子

名残惜しき秋の土佐路やほいたらね

賢一

長き夜や友と明日発つ旅支度

繁一

階下より笑ひ声する夜長かな

孝志

入道雲海の底から仁王立ち

洋一

人はみな恙のありて秋彼岸

信江

長き夜や深き闇ある読書灯

静江

栞紐使わぬままの夜長かな

鎮夫

夜半の秋書き物長く楽しめり

国祥

山麓がこきあ紅葉に染まる富士

隆彦

登高や空に帽子を投げてみる

重子

秋灯や時折うなる室外機

朱美

炎帝が親しき友を連れ去りぬ

紹子

ここまでを花野とさだめ道戻る

晴代

長き夜の眠りは深し転居あと

久恵